

第1分科会 新時代の公民館運営（シンポジウム）

討議のテーマ

時代のニーズに対応した公民館の在り方

・ 討議の柱

社会の要請や変化に対応した公民館運営の在り方について

・ コーディネーター

沖縄県琉球大学教育学部教授 生涯学習教育研究センター長

井上 講 四

・ シンポジスト

佐賀県教育庁社会教育文化財課 社会教育主幹

大分県大分市坂ノ市公民館 公民館主事

沖縄県那覇市中央公民館 館長

沖縄県NPO法人なはまちづくりネットサポートステーションなは 代表理事

関 弘 紹

須 藤 里 美

前 原 信 喜

大 城 喜 江 子

・ 記録者

沖縄県教育庁生涯学習振興課 社会教育主事

沖縄県名護市教育委員会社会教育係 係長

長 尾 順 子

田 畑 晶 吾

・ 運営責任者

沖縄県教育庁生涯学習振興課 指導主事

平 良 正 哉

・ 会場責任者

沖縄県那覇市首里公民館公民館 主事

伊良皆 淳



「公民館は、教育機関として生き残れるのか？」 ～思い違いの30年の反省を込めて～

佐賀県教育庁社会教育文化財課 社会教育主幹 関 弘 紹

1. はじめに

私は、昭和56年6月「生涯教育について」という中央教育審議会答申が出された年度に社会教育の世界に足を踏み入れた。

社会教育から生涯教育・生涯学習への移行期で、県内の各種機関団体や首長部局を巻き込んだ会議等の立ち上げなどに関わり、「生涯学習が振興すれば、我々社会教育が学校教育と肩を並べられる。主役になることができる」と思い違いをしてしまった。その後、県立・国立の少年自然の家や県立生涯学習センターに勤め、現在に至っている。

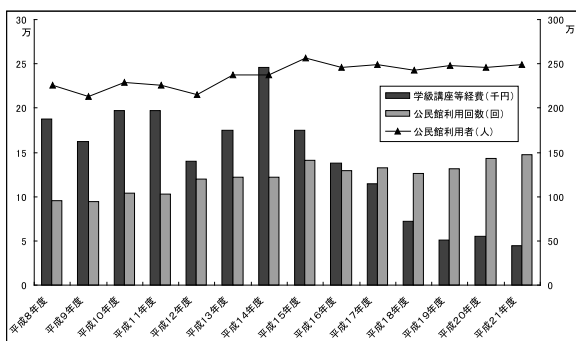
2. 現状と疑問

公民館は、市町村合併や財政難に伴う職員や事業減、さらには運営状況の評価基準が利用者数の増加にシフトされたことなどから、利用者の利便性・使い勝手のよさのみに意識が注がれて、教育施設から貸し館施設へと変化しつつあるのではないかと。

事業も、趣味・教養・娯楽・軽スポーツ花盛りの場となりカルチャーセンター化し、堅苦しい公的な課題や地域課題・生活課題は集まりが悪いため関心を示さなくなっている公民館が多くなった。

佐賀県内公民館は、市町直営が80%、地域委託14%、指定管理20%である。

佐賀県内公民館	平成元年	平成20年
公民館数	125館	137館
公民館職員数	417人	400人
併置職員平均	3.3人	2.9人



地域委託・指定管理者制度は、従来のように役場職員の人事異動ではなく外部活力の導入により、問題意識・やる気のある人材が登用された公民館は、地域連携や課題解決のために更に活発に運営されて

いる。反面、地域住民のニーズにさえ応えていればよい、著名人や大学教授を講師陣に揃えておればよいといった公民館も出てきつつあり、公民館格差・地域の社会教育格差を拡大した。

佐賀県において、10年前に学校・公民館・地域住民、教育行政、大学教授等で構成された「佐賀県学社融合研究会」を立ち上げ、数年間の研究協議を行ってきたが、『融合』することなく解散した。現在、いくつか学校支援地域本部事業を活用しているが、双方の理解が進むことは簡単ではない。

多くの教育委員会は、学力に大きくシフトしたが、机上の点数だけで子どもたちの「生きる力」は、本当に育めるのだろうか。

昭和40年代、子どもたちの生活体験は貧困化し、三無（四・五とも）主義等、人間形成に幾多の問題を生じたことから青少年教育施設での集団宿泊体験活動が盛んに行われ、最近は通学合宿も地域の力を借りて行われている。ただ、子どもたちを変容できているのだろうか。成人と同じ「講座をたくさんやっています。多くの人を集めました。みんな楽しんでいました。」で、すましていないのだろうか。

3. 何をなすべきか。

公民館が直営であろうと、地域委託や指定管理であろうと、地域課題を解決するもの、地域連帯の醸成に資するもの、住民の学習成果を活用すべきものと住民自らが生涯にわたって学習活動をして楽しむことへの支援をすることの区分けが必要となっているのではないかと。

さらには、公民館事業では、何をなしたかだけにとどまらず、受講者にどのような変容をもたらしたか、成果を上げたのかが問われているのではないかと。そのためには、単に利用数値だけではなく、市町教育委員会と公民館人とが、どれだけ日頃からコミュニケーションをとっているかが問われる。

また、事業費も少なく、職員も少ない状況では、地域のヒト・モノ・カネの積極的活用とともに、他機関との積極的なネットワークを活用することが必要である。「家庭教育支援者と連携した子どもの育ちを中心に据えての学校支援」や「地域の一人前を創る青少年教育」、社会教育の視点から「老老（認知）介護」等に何か特化なども一考ではないかと。



女性パワーをまちづくりに活かす！

大分市坂ノ市公民館 公民館主事 須藤 里美

1 坂ノ市地区のこと

坂ノ市地区は大分県の県都大分市の東部に位置し、世帯数6,773戸、人口17,194人の海・山・川といった自然環境に恵まれた地区である。

昔から農業を営む家が多く、近所同士、協力して生活するのが当然という意識がまだ残っている。また、1,400年以上続いている萬弘寺の市は名物『物々交換』で有名であり、歴史と文化を感じさせる町である。

しかしながら、近年、大分市の区画整理事業により、大分市のベッドタウンとして新規の居住者が増加し、住民の意識にも変化が現れてきている。

2 女性サークルについて

(1) 背景

大分市ではこれまで、女性の自立・社会参加を目指し、公民館主催女性教室の設置を進めてきた。

(2) 公民館に関わる女性サークル

① 「あけぼの」

公民館創成期に主催教室として結成され、現在は自主運営。お互いが講師となり料理教室など趣味的な活動を行っている。平均年齢70歳。会員は20名程度。

② 「カラーズ」

今年度から自主運営。家庭教育学級などに関わっていたメンバーが毎年テーマを決め、「コミュニケーション」などについて学習している。平均年齢50歳。会員は10名程度。

③ 「これでいいんかえ!?さかのいち」

家庭教育学級のリーダーが集まり、地域内の子育てに関する企画・運営をしている。平均年齢40歳。10名程度。

④ 「リサイクルリンエコ」

公民館主催の環境教育の教室生が終了後に自主的に運営。リサイクルなどについて学習している。年齢は30歳代～70歳代。20名程度。

3 公民館事業・まちづくり事業への協力

公民館主事のコーディネートのもと、女性サークルのメンバーが公民館で行う様々な事業に参加している。

(1) 公民館事業の中で

- ・公民館主催事業の中で会場整理や受付、子どもの見守りや、世話などのボランティアに積極的に参加した。

- ・「チャレンジ！おおいた大会（第8回全国障がい者スポーツ大会）」の選手に古布を使った“マスコットお守り”を作成・贈呈した。

※人権啓発の取組として『おおいた人権フェスティバル』にその経緯・様子や作品を紹介した。

(2) まちづくり事業の中で

まちづくりイベント『どっとんフェスタ』では、「これでいいんかえ？さかのいち」のメンバーが実行委員会の委員長、副委員長等中心的な役割を果たし、自治会長等と協力して実施しており、行政主体から住民主体のイベントへと移行することができた。

4 サークル育成について

(1) 公民館主事としての関わりについて

それぞれのサークルに公民館主事自身も一緒に活動したり、情報交換・提供したりするなどの関わりを持つことによって、それぞれの個性を見出して仲間づくりを進めている。

(2) 若い世代の人材育成

毎年、新成人が、市主催の『成人の集い』に参加したあとに公民館で『20歳の再会』を自主的に開催する。企画・運営のサポートをする中で、新成人に公民館での活動への参加を呼びかけ、実際にボランティアやスタッフとして活動してもらえるようになった。



5 成果及び今後の課題

<成果>

公民館活動を通して結成されたサークルが、公民館事業への関心を高め、さらにはボランティア等により、様々な場面で公民館に協力する体制ができてきた。

<課題>

現状では、公民館主事のコーディネートをとおして連携している女性サークルなどの各団体が、将来的には自主的に連携し、持っているパワーを一層まちづくりに生かせるように働きかけていかなければならない。



沖縄県那覇市中央公民館 館長 前原 信喜

1. はじめに

(1) 地域の概要

県都市那覇は4地区（旧那覇・首里・真和志・小禄）で31万人余の人口。

公立公民館が各地区2館で計7館が設置され、館長、公民館主事、社会教育指導員の職員が配置され、内2館が館長以外NPO法人団体へ事業運営の委託をしています。

自治公民館（類似施設）は、各自治会ごとに設置され施設の大小併せて150余の館が各自治会の財産で施設管理や事業運営等を行っています。

(2) 事業の概要と取り組み

公民館は、中核的学習施設として位置づけ、生涯学習と地域活性化の観点から、地域のコーディネーターとして、「学習ネットワーク」・「場・空間のネットワーク」・「人的ネットワーク」・「情報ネットワーク」の4大事業ネットワークの形成を図り、地域のコミュニティー作りの拠点になることを目指す。

① 地域連携を深める事業の推進

各種地域団体、行政他機関等施設との連携融合を図り、地域のコーディネーターとして地域のコミュニティー形成に寄与する。



地域の自治会、企業、学校等との連携のもと、世界遺産「識名園」を会場として開催するイベント「識名園友遊会」

② 生活文化を高める事業

生涯学習の観点から各種学級・講座等を開設し、地域住民の教養・知識・技術を高め、学習

を通して生き甲斐作り、仲間づくりの機会を提供する。



大学との連携による「乳幼児学級」

③ 地域生活に根ざす事業の運営

公民館利用団体間の交流・連携を図り、明るく楽しい公民館、そして頼れる地域の学習相談機関としての公民館運営に努める。



(小学校の総合学習) 公民館利用団体による小学生への「三線」の指導

(4) 終わりに

生涯学習・社会教育が目指す人づくり・地域づくりは益々複雑化、多様化する中、今後の公民館の役割として、地域社会と協働できる事業を的確に把握しつつ、更に連携強化を図り、学社融合的公民館事業を取り組んでいく必要がある。



「NPOが運営する公立公民館」 ～地域づくりが子どもの笑顔に生かされるように～

沖縄県特定非営利活動法人なはまちづくりネット 代表 大城 喜江子
(那覇市繁多川公民館一部業務委託)

1. はじめに

(1) 繁多川の概要

沖縄県那覇市の東南に位置する繁多川は、那覇市の人口約31万人の30分の1、1万1000人の市内でも珍しい墓地地帯（中国の影響を受けた破風墓）で、第2次大戦当時の避難壕が多く点在する。湧き水が豊富なことから古くから豆腐づくりが盛んで今尚美味しい豆腐がつけられている地域である。

(2) なはまちづくりネットの紹介

平成16年11月に竣工された那覇市で7番目の公立公民館を、社会教育指導員や、社会教育活動経験者が一年間社会教育の理論を学び、実践と理論を持って平成17年1月、沖縄県で初めてのNPOの当団体が、講座の企画、運営等の業務の委託を受けた。

(現在は2館あり)

受託当初より、地域に学び地域に溶け込み地域で機能する公民館を心がけて、那覇市の「協働のまちづくり」を支える市民育ての場として、また、自治意識を持った市民性教育の場として公民館を運営している。

2. 委託内容と運営の特徴

(1) 7項目（市民講座・成人講座・地域連携事業他）110時間以上の講座を行うことであるが、年間を終了する頃には、その時間をはるかに越えた時間数の講座を行っていることになる。（地域や団体、機関からの提案や要望を、フットワークの軽さとネットワークの広さで市民のニーズに応える）

(2) 公民館の立地条件の不備を地の利として活かす

当館是那覇の外れにあり、公共交通が1本で1時間に2～3台の運行で駐車場がなく、夜は閑散としている。そこで、日中に自治会や老人センターや学校等へ当館が出かけて行く出前講座にすること等、不備を利とすることを考えた。

3. 地域づくりを学校教育に生かす（学社融合）

那覇市の第四次総計「なはが好き！みんなで造ろう子どもの笑顔が輝くまち」を想定した地域づくり「誇りのもてるまち」の具現化を、子どもたちが遊ぶ地域と学ぶ学校で生かす。（例：沖縄在来大豆の栽培から豆腐づくりを地域の皆さんが指導者の総合的な学習が、現在近隣小中学校4校で行われている）



脱穀大豆をミージョーキで選別（平たい籠）



車棒で脱穀

4. 平成17～21年度までの連携実績

年度	学校	地域・自治会	社会教育団体	行政	企業その他
17年		1	1		
18	5	2	2		
19	12	6	3		1
20	6	5	1	1	5
21	17	10	6	1	10

(その他には幼稚園も入っている)

事例

- ・公民館講座を大学構内で公民館・地域自治会・大学・中学・一般公募市民で行った。
- ・キャリア教育（沖縄県みんなでグッジョブ運動事業）公民館・小学校・地域自治会・地域企業・キャリアセンター（働く人に触れジョブシャドウイング）で行う。

5. 成果と課題

まちづくりの取り組みは地域が活性化して、すぐりむん認定（名人さん認定）等、地域独自の事業展開を行うようになった。そうした地域の教育力を継続的に学校教育に生かしていけるコーディネーターが必要であろう。

第2分科会 青少年教育

討議のテーマ

青少年の健全育成と体験活動を推進する 公民館活動の在り方

・ 討議の柱

- ① 体験活動、ボランティア活動を推進する公民館活動の在り方について
- ② 地域で子どもを育てる公民館活動の在り方について

・ 助言者

長崎県長崎大学生涯学習教育研究センター 准教授

新 田 照 夫

・ 司会者

沖縄県那覇市教育委員会生涯学習課 課長

宮 内 勇 人

・ 事例発表者

長崎県大村市教育委員会中央公民館 公民館主事
沖縄県那覇市久茂地公民館 館長

楠 本 晃 士
田 端 研 二

・ 記録者

沖縄県教育庁生涯学習振興課 社会教育主事
沖縄県那覇市小祿南公民館 公民館主事

大 山 正 吾
知 花 伸 幸

・ 運営責任者

沖縄県教育庁生涯学習振興課 社会教育主事

安 里 剛

・ 会場責任者

沖縄県那覇市久茂地公民館公民館 主事

金 城 洋 志

「チャレンジキャンプ in おおむら」の取り組み ～体験活動を通して生きる力を育む～

長崎県大村市中央公民館 公民館主事 楠本晃士

1 はじめに

(1) 大村市の概要

大村市は、長崎県のほぼ中央に位置し、西に大村湾、東に多良山系、そのふもとに郡川が流れその流域に沿って扇状地が広がる。自然豊かで風光明媚な田園都市である。面積126.33k㎡、人口92,065人、世帯数38,226世帯（平成22年4月現在）で、人口は年々増加傾向にある。

(2) 公民館の実態

大村市の公立公民館は、中央公民館及び3つの地区公民館で構成され、会議室の貸し出し、講座等を開催し、学びの「場の提供」と「機会の提供」を行っている。

また、自治公民館は、市内に128館があり、各地区で町内会等地域住民の様々な教養、レクリエーション活動の場として利用されている。

複合施設として大村市体育文化センター（愛称：シーハットおおむら）があり、「スポーツ・芸術・教養 -さまざまに広がる喜びがクロスする場所」として市民に親しまれている。

大村市中央公民館はこの「シーハットおおむら」の中の教養文化棟に位置している。視聴覚ライブラリーも備わっており、コミュニティセンターとして市民の生涯学習の拠点となっている。

2 活動の内容

本講座の取り組み

(1) 目的

夏の暑さの中で、自分の荷物を背負い自分で歩き、自分で考え作った料理を食べ、自分で寝るなど、生活の基本的行動にチャレンジする。そして自然の恵み、厳しさを感じ、また人の優しさ、集団行動の大事さを体験する。このような活動の中から、他者を思い、自分の個性を大事にして、社会の中で逞しく生きる力を育む。

(2) 主催

大村市中央公民館・大村市レクリエーション協会

(3) 募集人員

大村市内在住の小学4年生から高校生までの男女で、全日程参加できる者15人。

（ただし、小学4年生の場合は事前に相談。）

(4) 場所

① 体験地

多良山系 五家原岳（標高1,057m）

経ヶ岳（標高1,076m）ほか

② 宿泊地

南川内宿営地、金泉寺広場、黒木キャンプ場

(5) 日程概要（平成21年度）

【事前研修】

5月16日	参加者、保護者へのオリエンテーション
5月23日	主食のみの炊飯練習
6月6日～7日	山道徒歩2時間・炊飯・野宿の練習
7月11日～12日	舗装道徒歩3時間・洗濯・炊飯・野宿の練習

【本事業】

8月8日	出発式 中央公民館～舗装道約8km徒歩～南川内 野宿
9日	南川内～五家原岳～山道約8km～金泉寺 野宿
10日	金泉寺～経ヶ岳～山道約6km～キャンプ場 1人野宿
11日	キャンプ場にて自由（川遊び、洗濯、魚の手掴み等）野宿
12日	キャンプ場～舗装道約18km～中央公民館 解散式

(6) 実施要綱

① 生活は可能な限り原始的なものとし、身体で感じることを重視する。

衣：持参する着替えは最小限とし、努めて、毎日洗濯させる。

食：食材料は、自分たちで計画した献立にそって購入させ、自分たちで作らせる。

住：可能な限り毎日野宿とするが、天候急変や個人差に備え、小屋も確保する。

- ② 移動はすべて徒歩とし、持つ物は個人の衣服・食器・組共通の食材や鍋等とする。
- ③ 活動はゆとりを持たせ、1日のうち、移動3～5時間、炊飯2～3時間、他は自由時間とする。睡眠は8時間以上を確保する。
- ④ 異年齢集団で家族的な雰囲気の中で進めるため組の話し合いを毎日行う。また、子どもには、毎日の反省などをノートに書かせて、スタッフが確認することで悩みや課題事項の早期発見に努める。
- ⑤ 健康チェック（便通・食欲・睡眠・その他）を毎日の朝夕に行い、異常がある場合は早急に対処する。この際、その後の活動に参加できない場合、保護者に連絡し、参加を中止する。また、スタッフ相互に情報を交換するためにミーティングを毎日行う。



歩行の様子と火起こしの様子



(7) 経費

参加者負担	食費（本事業のみ）	4,050円
	施設使用料等	3,950円

(8) その他

- ① 事業報告書を作成する。
- ② 参加者・保護者・スタッフとも感想文を書く。
- ③ 報告書の概要
事業概要（事前研修から本事業までを全体・各班別に記録報告）

3 評価・成果

(1) 評価

チャレンジキャンプでは、子どもたちが自然の厳しさや優しさの中でチャレンジすることで、人として生活をしていく上での基本的事項、共通に行っている生活行動を仲間とともに協力しあって行動する中で体験を重視し、『自主性』や『生きる力』を身につける。

現代では『生きる力』を育むことが難しいかもしれないが、チャレンジキャンプにはその要素が多く詰まっており、参加者は事前研修の時からくればると、人としての優しさ、逞しさを身につけている。

(2) 成果

キャンプのプログラムが生活として連続しているため、総合的な能力が試される。そのことから参加した子どもたちは、自主性が芽生え、家事の手伝い等積極的に行動している。真の意味での「生きる力」がつかは、今後の成長を待たなければならないが、その出発点としての成果は十分果たしていると考えられる。

また、異年齢集団の形成の教育効果は大きいものがある。コミュニケーション能力等の向上など、目的以上の成果が期待できる。

最後に、保護者の感想によれば、現場に参加することが出来ないで、自分自身にとってもチャレンジであり、自分の子育てを反省するいい機会だったという方もいた。

4 今後の課題

スタッフの多くは、大村市レクリエーション協会や看護師の方々に、高校生OBや大学生、社会人のボランティア参加もある。

チャレンジキャンプの特性上、高いレベルの判断力や行動力を求められることが多い。経験豊富で状況に応じて適切に対応できるスタッフの確保は不可欠である。

しかし、今までのベテランスタッフも年齢を重ね、家庭の事情や体調管理面からもお願いしづらい部分がある。

このようなことから、新たな人材発掘・養成を行うことが必要である。

地域で子どもを育てる公民館活動の在り方

沖縄県那覇市久茂地公民館 館長 田 端 研 二

1 はじめに

(1) 那覇市の概要

① 那覇市は、沖縄県の県都として、人口31万人余を有する政治・経済・文化の中心地である。東に首里城のある首里台地、そこからゆるやかな傾斜で西の平野部へと街は展開している。那覇は古くから港が整備されるなど、海外との交流拠点として、琉球王国の文化が華開いた街である。

(2) 久茂地公民館の紹介

① 久茂地は那覇市の中心部、沖縄県庁や那覇市役所に近い官庁街にある。

沖縄が本土復帰する前の昭和41年、米軍統治下の荒れた世相の中で、様々な問題が起きていた。そのような状況の中で、子どもたちが健全に育つようにとの願いをこめて「沖縄少年会館」が沖縄子どもを守る会によって建設された。

7階にプラネタリウム、6階に映画ホール、5階に科学展示室、3、4階に宿泊施設と、当時としては規模、設備とも最も進んだ教育施設であった。復帰前後の施設の乏しい沖縄の教育に果たした役割は極めて大きい。その建設資金は県内だけでなく全国からの募金でまかなわれたことも特筆すべきことである。

しかし激動する社会状況の中で館の維持が経済的に困難となり、社会教育施設として広く市民に寄与するため、昭和54年、那覇市に移管され那覇市久茂地公民館として生まれ変わった。

3階には児童館、4階には図書館が併設され、子どもたちの声が館内に響いている、にぎやかな公民館である。

2 活動の内容

(1) 久茂地公民館のスローガン

「科学する子どもの心に火をつける」を目指している。

(2) 公民館活動の目標（青少年教育）

- ① 沖縄少年会館からの理念を引き継ぎ、子どもの科学する心を育てる事業を実施。
- ② 他の学校からの参加者とも友達になるよう、子ども同士の交流を心がける。
- ③ 子どもの科学する心をサポートできるような、大人の指導者を育成する。
- ④ 低学年は親子の絆を強めるように、親子で取り組めるような内容に配慮する。

(3) 具体的活動事例

- ① プラネタリウム事業：沖縄少年会館から引き継いだプラネタリウムを活用した投影事業を、昭和54年の開館当初よりおこなっている。個人及び家族向けの一般投影と、保育園、幼稚園、小学校等向けの団体投影があり、最近では年間約一万人の見学者がある。
- ② 子ども向け科学教室：小学校との連携でスタートした「子ども科学クラブ」、プラネタリウム投影と工作をセットにした「子どものためのプラネタリウム」、その他の夏休み工作教室等がある。
- ③ 大人向け指導者養成講座：「星空案内人養成講座」は年8回開催、JAXAと共催の「宇宙教育指導者セミナー」は年1回開催。
- ④ 親子向け事業：KU-MAの会、JAXAと共催の「宇宙の学校」、「コズミックカレッジ」。どちらも低学年の親子向けである。また、開館当初から30年以上継続している「親子星空教室」は小学5年生の親子。どちらも親子で実験や観察をすることで、親子の結びつきを強め、科学への関心を高める。
- ⑤ 星空観望会：年間5、6回、実際の星空を観察する機会を親子、一般向けに設けている。
- ⑥ その他：昔ながらの方法で基幹産業を体験してもらおう「子ども黒糖作り」など。



(「宇宙の学校」かさ袋ロケットを親子300人で実験)



(日食観望会で望遠鏡の準備をする星空案内人)

3 活動の成果

(1) 科学教室を本格的に始めて8年になり、近隣の小学校だけでなく那覇市全域から参加者が集まるようになった。また、何度も参加するリピーターの子も出てきて、科学の楽しさを理解し、未来への夢を抱かせることができつつある。

親子で参加する「宇宙の学校」は、昨年度250組、今年度150組の応募があり、非常に人気がある。家庭での学習（実験）を呼びかけていて、親子でいろいろな実験ができると好評である。

(2) 星空案内人養成講座の受講生は、2年ほど前から公民館や小学校主催の星空観察会で講師や助手を勤めるようになり、人数は多くないが着実に育っている。宇宙教育指導者セミナーの受講生は、初めて名護市で開催されたコズミックカレッジや、恩納村まつりでのJAXAイベントに子ども向け工作のサポートで参加しイベントを成功させた。こちらも成果が出てきた。

4 今後の課題

○できるだけ多くの子に機会を与えたい

少子高齢化が進む社会の中で、子どもたちの理科離れ、技術立国日本の危機が問題視されている。しかし当館の科学教室は、そのためだけのものではない。宇宙というキーワードの中には、理科だけでなく文学、芸術等、多くのものを含んでいる。

肝心なのは、子どもが興味を持った時に、それを深める材料を大人が提供できることである。沖縄県内には残念なことに科学館と呼べるものがないので、子どもたちの夢の選択肢を増やすという意味でも、公民館で科学講座を開催している。

科学講座は子どもたちに将来の目標を考えさせるだけでなく、親子で取り組むことで家庭の教育力構築の手法としても使える。低学年のうちに親子で連続講座に参加し、一緒にひとつの問題に取り組むことで、親子関係がよい方向に進むと期待される。

また、指導者を育成することで、地域に子どもたちに関わる大人を増やすことにもなる。子どもたちと顔見知りの大人が増えることで、子どもたちを見守る目が増え、健全育成に寄与できると考えている。指導者が増えれば、活動に参加できる子どもたちも増えることが期待できる。

ただし指導者講座を受講後の活動の場が受講人数に比べて少ないので、その後の育成がなかなか進まない。また、仕事の関係で参加しにくいなどの問題点もある。

これらの実現に向け、以下のことに取り組む。

- ① 指導者育成に参加した大人の実践の場を増やし、さらなる育成を図る。そして指導者同士がお互いに助け合えるようネットワークを作り上げる。
- ② 別の公民館でも科学講座を開催してもらえよう働きかけ、受け皿を増やし、希望者をできるだけ受け入れる体制を作る。
- ③ 強く興味を持った子どもたちに、さらに学習できるような情報提供やサポートを整備する。

第3分科会 家庭教育

討議のテーマ

家庭教育支援のための公民館活動の在り方

・ 討議の柱

- ① 家庭の教育力向上に関する学習機会や情報を提供する公民館活動の在り方について
- ② 子育てを支援し、ネットワークを広げる公民館活動の在り方について（NPO等の多様な団体との連携を含む）

・ 助言者

宮崎県教育庁生涯学習課 主幹

竹内 一久

・ 司会者

沖縄県沖縄市教育委員会指導部 部長

浜口 茂樹

・ 事例発表者

宮崎県日南市立南郷小学校 地域コーディネーター
沖縄県那覇市石嶺公民館 館長

矢野 富子
島袋 和美

・ 記録者

沖縄県教育庁那覇教育事務所 社会教育主事
宮崎県南城市教育委員会教育指導課 主事

中村 斉
小橋川 星子

・ 運営責任者

沖縄県教育庁生涯学習振興課 指導主事

松原 健蔵

・ 会場責任者

沖縄県那覇市石嶺公民館 公民館主事

平良 俊弥

公民館『寺子屋活動』 ～参加して つながり合って 育て愛（合い）～

宮崎県日南市南郷小学校地域コーディネーター 矢野 富子

1 はじめに

南郷町のある日南市は、宮崎県の南部に位置し、東に日向灘をのぞむ、豊かな自然あふれる町です。南郷町の美しい海は、昭和45年、国内初の海中公園に指定され、沖合を流れる黒潮は穏やかな気候をもたらしてくれています。

日南市南郷町は、3小学校2中学校、公民館（公立・自治）は町内に18館設置されており、地域住民の交流を推進することに適した地理的条件を揃えています。

本県では、平成18年度から平成20年度まで、学校、家庭、地域社会が子育ての目標を共有し、それぞれの役割を果たすとともに、連携を図りながら地域で子どもを育てるシステムを創るため、「地域で子どもを育てる『地域教育システム創造』実践モデル事業」を行ってきました。

平成21年度からはそれぞれの市町村で引き続き事業を推進し、南郷町では、公民館における「寺子屋活動」を実践しています。

2 活動の内容

(1) 地域で子どもを育てる『地域教育システム創造』実践モデル事業について

ア 地域活動への支援

- ・地域全体で取り組むボランティア活動
- ・世代間交流活動
- ・地域での子どもを見守る活動
- ・土曜日など休業日等を活用した学校外活動

イ 家庭教育への支援

- ・学校行事等を活用した保護者への子育て学習機会の提供
- ・各地区における教育懇談会
- ・親子の交流を深める活動
- ・子育ての相談、支援に関する活動

ウ 学校教育への支援

- ・学校の教育活動を支えるボランティア活動

- ・学校の環境整備への協力
- ・職場体験活動など、地域で実施される学校の教育活動を支援する活動
- ・学校の安全確保に関する活動



「地域の方とのあやとりの様子」

(2) モデル事業時の公民館寺子屋活動について

ア 概要

- ・1小学校区で1公民館の寺子屋
- ・週2回（火・金曜日または水・金曜日）
- ・小学校1年生～6年生までの児童全82名
- ・ボランティア数 1館1回あたり4～5名

イ 公民館の位置づけ

- ・異学年の子どもたちが日常的に集まり活動できる場所
- ・地域の大人と子どもが交流できる場所
- ・大人にとっても自分の力を発揮できる場所
- ・さまざまな体験活動ができる場所
- ・放課後の子どもたちにとって安全な場所
- ・参加児童の親同士の交流の場所

ウ 参加募集の方法

- ・各小学校を通じて募集用紙を配付
- ・きまりの周知（趣旨・時間・活動内容）
- ・学校を通じて教育委員会で集約
- ・参加児童の保護者の会を実施

エ 活動内容

- ・ 毎回行う活動、定期的に行う活動
- ・ 季節感を味わえる活動
- ・ ボランティアの創意や工夫を生かした活動
- ・ 「寺子屋ならではの」活動

オ ボランティアの配置

- ・ 学期ごとに参加希望を提出
- ・ 実施前に参加の有無を確認
- ・ 活動内容によってピンポイントで参加依頼
- ・ ボランティア研修会

カ 1日のプログラム

- ・ 公民館長、公民館スタッフが受け入れ準備
- ・ 放課後、公民館に集合（15時30分）
- ・ あいさつと出席確認
- ・ みんながそろうまで思い思いの活動（宿題）
- ・ 活動計画にそって、メインの活動の実施
- ・ 迎えに来た保護者も活動に参加
- ・ 17時には終了し、あいさつをして帰宅



「地域の方との学習の様子」

(3) 現在の公民館寺子屋活動

ア 概要

- ・ 夏休み期間中に地域の児童を集めて実施
- ・ お盆や日曜日を除いて25日程度
- ・ 朝8時から午後4時まで
- ・ 地域の方々が講師となって活動
- ・ 昼食とおやつは、子どもたちが自ら調理
- ・ 時間の流れや活動内容については、子どもと話し合いながら臨機応変に決定

イ これまでの活動例

[昼食の様子]

- ・ 地元の高齢者も参加して、子どもと一緒に作り食べながら、交流を深めた。
- ・ 材料は、子どもの家で採れたものや高齢者や地域の方々が持ち寄ったものを使う。

[体験活動]

- ・ 地域の方にお点前（茶道）の作法を教えてもらった。その後、それを生かして高齢者クラブの活動の際に子どもたちが高齢者に対してお点前を披露した。
- ・ その他にも、地域の方が講師となって、習字、絵手紙、ちぎり絵、竹細工、押し花などの活動を行った。どの講師も子どもたちをよく知っており、子どもたちも安心して活動に参加していた。

3 成果

- 夏休み期間中、親にとっては安心して子どもを任せられる場所となっている。
- 子どもたちの発案を生かしたり、その時々状況に応じて活動内容を変更したりできるので、子どもたちが生き生きと積極的に活動できる場となっている。
- 家庭ではなかなか徹底できない「しつけ」について、大勢の中で学ぶことにより自然に身につけることができている。
- 地域の大人とのかかわりがごく自然にできるようになり、共に生活することで異年齢相互のつながりも深まった。
- 寺子屋活動の中で、子どもたちの成長を感じられる場面に数多く出会うことにより、高齢者や地域の人々にとって自己有用感や地域とのつながりを感じる場となっている。

4 今後の課題

- 無理のない取組の継続化
- 広がりのある取組への発展
- 保護者の参加を促す手立て
- 子どもたちの主体性を生かす工夫

家庭教育支援のための公民館活動

～公民館での理科、算数講座～

沖縄県那覇市石嶺公民館 館長 島袋和美

1 はじめに

(1) 那覇市の概要

那覇市は、沖縄県の県都として、人口31万人余りを有する政治・経済・文化の中心地です。また首里台地（標高165m）から東シナ海に面して、ゆるやかに傾斜した平野部を背景に、古くから港が整備されるなど、海外との交流拠点として、「琉球王国」文化が華ひらいた街です。

先のアジア太平洋戦争末期の沖縄戦では、街は焦土と化しましたが、1972年の日本復帰を経て、多くの県民市民の努力と協力によって、現在の那覇市へと発展してきました。

21世紀をむかえ、那覇市は、沖縄都市モノレール・中心市街地及び新都心地区を核としたまちづくりを展開しています。また市民との協働のまちづくりや次代を担う子どもたちの育成を中心とした諸施策を展開しています。

(2) 首里石嶺町について

石嶺町は首里の北東に位置し、3小学校・2中学校・1高校と県立児童相談所を始め児童園・厚生園・救護園・厚生指導所・県総合福祉センターなどを擁する、文教と福祉の町です。

石嶺町にはいくつかのボランティア団体と青少年健全育成協議会等があり、伝統文化の継承をとおして、活発な活動を展開し青少年の健全育成に努めようとする地域の結束力と活動が地域の教育力の高さを表していると思います。

那覇市には7つの公立公民館が設置されており、石嶺公民館は6館目の公民館として平成8年6月に開館しました。社会教育施設（公民館・図書館）と社会体育施設（温水プール・トレーニングルーム）との複合を特徴とし、石嶺文化スポーツプラザの愛称で地域の方々に親しまれています。

(3) ねらい

石嶺公民館では家庭教育支援を目的とし、学齢期に際して苦手意識を持ちやすい理科、算数に興味を

持てるよう、親子で楽しく学ぶ機会とした講座を行っております。受講生がその学んだ事を持ち帰り各地域に広げられるようにしたいと思います。

2 活動の内容

(1) 理科、算数講座事例

① 家庭教育学級「おもしろ ふしぎ大実験～空気と水のふしぎ体験～」

小学校5年生以上から大人までを対象とし那覇市首里石嶺町出身で北九州市立大学教授を講師に、空気と水の圧力を利用した実験やクイズを行いました。



(マグデブルグの半球実験)

上の写真は2個のボウルを球体になるように付けて中の空気を抜き、そのボウルを綱引きして外す実験です。実験で目に見えない空気には重さ（圧力）があるという不思議さを体感的に学ぶことができました。他にもいくつかの実験を行い、科学に興味を持たせる機会としました。

② 家庭教育学級「算数遊びしませんか？～遊びを通して算数的感覚を育てる～」

算数教育に熱心な元小・中学校教諭・元社会教育指導員の方を講師に、幼児期、小学校低学年において親子で身近にある道具を使い、遊びを通して数にふれ、数的感覚を養うことにより

算数の学習にスムーズに入れるよう大人を対象とした講座を行いました。



算数遊びしませんか？
～遊びを通して算数的感覚を育てる～

③ 「夏の自由研究教室」

小学校 3、4 年生と保護者を対象に、夏休みに自由研究を楽しくできるようにテーマの選び方、進め方を理科の先生がアドバイスをします。自由研究の例として前年度はスライム作りと、日食の観察の方法等を今年度は浮沈子作りとマイクロスコープを使い野外での観察等を行いました。自由研究資料がたくさんあり家庭で楽しく取り組めるテーマ選びの大きなヒントになったと思います。

④ 親子ふれあい教室「サツマイモ栽培体験ひとつぼファミリー農場」

10年あまり続いている講座でサツマイモの栽培から収穫までの作業を 5ヶ月間にわたって親子が土に触れながら行い、植物の成長過程の観察と収穫後に自分で作った作物を料理し食する楽しみを共有し、親子のきずなを深める機会にもなります。

(2) その他 家庭教育支援に関する講座

① 乳幼児学級「すくすくひろば」～あせらず子育て親育て～

乳幼児を育てる保護者を対象に、親としての役割と責任を自覚し、子どもの健やかな成長のための学習で、楽しく子育てができるよう受講者間の情報交換、仲間作りをしながら、子どもの病気&予防接種、離乳食、また算数遊びの話などを取り入れた講座です。受講生が安心して

学べるように保育サポーターを付けています。

3 活動の評価と成果

子ども達の非行・問題行動を考えた場合に学習の躓きが気力の喪失・人格形成の躓きに繋がりがねなという思いがあり、そのなかで公民館が何ができるかと考えた時、子育て支援の中で算数、理科講座を取り上げました。

算数については、お母さん方より、「教え方によっては難しいという思いを取り除く事ができ、楽しく学ばせる工夫が分かった」と好評でした。お母さん方が子ども達に数の観念を教える機会づくりとなりました。幼児期から学ぶ体験をさせるのも大切だと思います。

理科については、理科離れが進んでいるとのですが、理科実験講座が開催できたら子ども達に理科への興味を持たせることができるのではないかとこの思いから、地域出身で大学の工学部教授の方を講師として講座を開催することが出来ました。講座には、120名余りの親子が集まり、いきいきと実験に参加し目を輝かせている子ども達を見たとき、子ども達は理科が嫌いではなく興味を持つ機会が少ないのだと感じました。

理科も算数も子どもの時から触れさせる機会が必要だと思えば活動は成果があったと思います。また親子での講座の参加や家庭での学習方法の学びは親子のきずなを深めるための良いきっかけになったと思います。

4 今後の課題

講座の回数、受講者数は限られており家庭教育支援には講座だけでは無理があると思います。成果を出すには意欲を持った方達の勉強会としてのサークル活動や、地域で核となる人材を発掘しそれぞれ活動していただき、そのために子ども会や地域自治会と協働できるよう考えていきたいと思っています。

また、家庭教育では生きる力の育成、人格形成も大切ですので、心の教育についての講座をもっと取り上げていきたいと思っています。

第4分科会 成人教育

討議のテーマ

生涯の各時期の学習ニーズ及び豊かな人間性の育成に対応した公民館活動の在り方

・ 討議の柱

- ① 幅広い年齢層のニーズに応じた学習提供と活用の在り方について
- ② 住民が地域課題を解決する学習活動と意識改革への関わり方について

・ 助言者

沖縄県NPO法人かごしま生涯サポートセンター 理事

石塚 勝郎

・ 司会者

沖縄県沖縄大学人文学部 教授

宮城 能彦

・ 事例発表者

鹿児島県鹿児島市吉田公民館 公民館主査

沖縄県読谷村教育委員会生涯学習課文化センター 係長

松永 貢
與那覇 徳雄

・ 記録者

沖縄県教育庁島尻教育事務所 社会教育主事

沖縄県豊見城市教育委員会生涯学習振興課 係長

平良 政枝
仲原 康浩

・ 運営責任者

沖縄県那覇市中央公民館 公民館主事

田盛 善宏

・ 会場責任者

沖縄県那覇市中央公民館 主幹

石原 実

公民館講座で広がる学びの輪 ～魅力ある学びの場づくりを目指して～

鹿児島県鹿児島市教育委員会 吉田公民館主査 松 永 貢

1 はじめに

(1) 鹿児島市の概要

鹿児島市は、鹿児島県本土のほぼ中央に位置し、北は姶良市、西は日置市、南は指宿市と接している。平成16年11月に、旧鹿児島市に隣接していた吉田町、桜島町、喜入町、松元町及び郡山町と合併し、人口606,153人、面積547.06km²となった。鹿児島湾をはさんで桜島を含んだ東西約33km、南北51kmの風光明媚で、都市機能が集積した南九州の中核都市である。

鹿児島市のシンボルとして知られる桜島は、市街地から約4kmの対岸にある。

現在は、2011年春の九州新幹線全線開通に合わせ、新たな観光都市としてのまちづくりを積極的に進めている。

(2) 鹿児島市地域公民館の概要

鹿児島市は、昭和48年に中央公民館、鴨池公民館を整備し、昭和55年までに8館を整備した。市町村合併後、旧5町の公民館施設を引継ぎ、平成20年10月には、14館目となる谷山北公民館を開館した。

鹿児島市には78の小学校区があり、これを14の地域公民館で分担し、市民の生涯学習の支援に努めている。平成21年度、14公民館合計の利用者が年間延べ100万人を超え、市民に身近な生涯学習施設として利用されている。地域公民館では、子どもから大人までの施設として事業を進めているが、その中で、成人教育に関する事業としては、次のとおりである。

ア 公民館講座の開設

公民館講座は、対象者を少年、親子、家庭教育、青年、成人、高齢者の6つの領域で開設している。平成21年度は、14館で合わせて432講座（募集定員9756人）に、15,317人の応募があり、11,231人の市民の方が受講した。そのうち、8,388人が成人である。

イ 研修会・講演会の実施

各14館ごとに成人を対象とした家庭教育研究会、人権問題研修会、教育講演会、企業内生涯

学習セミナー等を開催している。

ウ 自主学習グループの育成

14館で531のグループがあり、9,967人が会員登録して活動している。

エ その他の活動

校区公民館や社会教育関係団体と連携して地域活動を推進したり、総合文化祭などを開催したりしている。

(3) 吉田公民館の概要

吉田公民館のある吉田地域は、鹿児島市の北部に位置し、北は水田地帯、南は畑作地帯で農産物の生産が盛んである。吉田公民館は、昭和49年に吉田町中央公民館として開館し、地域の社会教育の拠点として、生涯学習を推進してきた。鹿児島市と合併してからは、鹿児島市の地域公民館の一つとして「市民 一人一芸・一学習・一スポーツ」をモットーに掲げ、市民に学びの場を提供している。平成21年度は、28の公民館講座を開設し873人の方が講座を受講した。

今回は、「鹿児島市の公民館講座」を事例に、成人教育への取組を紹介する。

2 鹿児島市の公民館講座

(1) 開設のねらい

市民のみなさんの学習ニーズに応えるとともに、様々な学習課題や地域課題を学習するために開設するものである。

(2) 開設までの準備

ア 開設にあたっての基本的な考え方

前年度の8月には、館長会、主査等の会で基本的な考え方を検討し、次年度の講座の重点等を決定している。

イ 学習ニーズの把握

各館ごとにアンケート等を実施し、学習ニーズの把握に努めている。

- ウ 公民館講座の実態把握(中間・年間まとめ)
 14地域公民館の「公民館講座の反省及び実績」を、次の項目で、9月に「中間まとめ」、3月に「年間まとめ」として状況を把握し、次年度の計画案作成に活かしている。
- (ア) 基本計画の反省(領域別及び講座別)
 (イ) 出席状況の実績
 (ウ) 地域別申込者数及び地域別決定者数
 (エ) 年代別申込者数及び年代別決定者数
- エ 次年度公民館講座の計画作成

生涯各期における学習機会の充実を図るため、青年を対象とした講座や高齢者を対象とした講座(高齢者いきいき元気塾)の実績、課題等を考慮して、全体の講座を決定している。

(3) 吉田公民館の講座について

各館においては、ニーズ調査の結果や地域の実態に応じて、限られた予算の中で特色を生かした講座の開設に努めている。50代以上が多く、学習に対しても熱心である。一方、青年等の若い世代の応募が少ないことが課題の一つになっている。こうした実態を踏まえ、吉田公民館では、次のようなことについて工夫・改善を図り、講座を開設している。



【初めての陶芸教室】

- ア 若い世代が参加しやすい環境作り
- (ア) 託児付講座の開設
- ・絵手紙入門講座など4講座
- (イ) 親子参加型の講座の開設
- ・親子ふれあい体操講座など7講座
- (ウ) 参加しやすい時間帯や曜日の工夫
- ・土曜日や夜間の講座を4講座
- (エ) 興味関心を持てる講座の開設
- ・マジック講座やヨガ入門、ホームページ作成、陶芸など
- イ 高齢者を対象とした講座

高齢者いきいき元気塾講座の充実

- (ア) パソコンに関する講座
- ・入門レベルの講座を2講座
- (イ) 健康に関する講座の開設
- ・健康体操、よしだ大学(講話とグラウンドゴルフ)

3 評価・成果

講座で学んだ受講生が自主学習グループの会員となり、継続して学習している人も少なくない。また高齢者講座「よしだ大学」は、毎年受講している人が多く、このことは、講座を企画する立場の者としては、大変ありがたいことであり、大きな成果である。今後もしピーターが増えるような魅力ある講座の内容になるよう、工夫・改善に努めていきたい。

鹿児島市14の地域公民館では、自主学習グループ生が、学習の成果を生かして講師を務める講座「市民はつらつ得意技講座」を2講座ずつ開設している。学んだことが生かされる生涯学習社会として受講生の意欲も高まっている。

4 今後の課題

講座の内容を工夫・改善したことにより、応募者も増えてきた。さらに充実した公民館講座の開設に向け、次のことについて改善を図り、幅広い年齢層の方が応募したくなる講座の開設に努めていきたい。

- (1) 20代から40代のニーズ調査と参加意欲を高める青年講座の開設
- (2) 高齢者の生きがいをづくりを支援するための講座の開設
- (3) 現代的な課題解決を目指す講座の開設
- (4) 地域の人材を活用した講座の開設
- (5) 地域や子どもとの交流活動の創出



【よしだ大学で子どもたちと交流】

伝統工芸ヤチムンを通じた「生きがい活動支援」と「サークル委託講座」の取り組み

沖縄県中頭郡読谷村教育委員会生涯学習課文化センター係 係長 與那覇 徳 雄

1 はじめに

(1) 読谷村の概要

読谷村は、沖縄本島の中部、西海岸に位置し、東シナ海にカギ状に突き出た半島で人口3万9千人余り（2010年6月）、岩手県滝沢村に次ぐ全国で2番目に人口の多い村です。

東には、緑濃い山並み、西は東シナ海に面し、南は「比謝川」を境とし、北は景勝の地「残波岬」に囲まれた、美しい自然と豊かな伝統文化が培われた村です。

記録によると、1372年読谷の「泰期」という人物が中山王察度の命により中国（明）へ進貢し、その後4回にわたって交易を行い、琉球の大交易時代を切り開いたと言われていています。世界遺産に登録された座喜味城を建立した「護佐丸」が君臨した15世紀初めには、長浜港が外来文化の入り口として栄え、今日、読谷山花織・焼物などの伝統工芸品や、村内各地に残る民俗芸能が伝承され、読谷の大地に深く根ざしております。

また、字楚辺には沖縄の三線の始祖と讃えられている「赤犬子（アカインコ）」が祀られており、そのゆかりの地として子どもから大人まで琉球古典音楽や島唄、琉舞が盛んな、伝統文化の豊富な村です。

「平和共存・文化継承・環境保全・健康増進・共生持続」を村づくりの基本理念とし、「ゆたさある風水、優る肝心、咲き誇る文化や、健康の村」を目標に主体的、創造的に進めているところです。

(2) 読谷村陶芸研修所について

読谷村陶芸研修所は、返還軍用地の跡地利用として沖縄の伝統工芸であるヤチムン（陶芸）の窯元を招致した『やちむんの里』内に平成6年に生涯学習施設として建造されました。

現在、読谷村陶芸研修所を活用し、幅広い年齢層を対象として次のような事業を行っています。

- ① 「村内保育所・小中学校ヤチムン体験」
- ② 「ヤチムンサークル活動（7サークル）」

③ 「高齢者学級（物作り体験）」

④ 「ヤチムン出前講座」

今回は、そのうち最も新しい「ヤチムン出前講座」の取り組みをご紹介します。

2 ヤチムン出前講座

(1) 講座の概要

介護予防事業の一環として、村内各自治公民館で月2回地域ミニデイサービスを行っている『ゆいまーる共生事業』と連携し、陶芸研修所まで足を運べない高齢者の方々が受講できるように、平成21年度より自治公民館へ出前という形式をとっています。

(2) 講座のねらい

本講座は、村内の高齢者を対象に、沖縄の伝統工芸であるヤチムンを通して、物づくりの楽しさや喜びを感じてもらい、健康で生きがいと潤いのある生活づくりに寄与する目的で開設しました。



ヤチムン出前講座の様子

(3) 活動の内容

◎ 講座の開催要領

○期 間：毎年4月～3月

- 講座数：1回（タタラ皿作成）
- 時 間：2時間程度
- 受講者：40名から60名
（各自治公民館によっては人数に増減有り）

(4) 活動の評価・成果

- ① 自治公民館が高齢者の生きがい、居場所づくりとして活用されている中で、陶芸研修所が関わりを持てた意義は大きい。
- ② 自治公民館は、戦前からムラヤー（公民館）として親しまれ、色々な活動（地域伝統文化・行事等）が行われてきた。その公民館で「土に戯れる」ことで、ボランティアと高齢者が助け合って一つの作品を仕上げる微笑ましい光景が生まれた。
- ③ 陶芸研修所で活動している陶芸サークルのメンバーが、地域に出向きボランティア指導員として貢献し「ふれあい」「助け合う」ことで互いに連帯感を深め、より地域を知ることが出来た。
- ④ 予算面においては役場福祉課と連携し、補助金の活用が出来、ふれあい交流館と自治公民館が互いに協力し、地域コミュニティの活性化につながっている。

(5) 今後の課題

- ① 地域ミニデイサービス『ゆいまーる』が、平日の午後2時から4時の時間帯を中心に行われているため、陶芸ボランティアの確保が容易ではない。定期的に活動していくためには陶芸ボランティアの育成が必要である。
- ② 陶芸研修所の利用者が多いため、年に4箇所程度しか「ヤチムン出前講座」を行うことが出来ない。村内23自治公民館が一回りするのに約5年程かかる見込みである。
- ③ ヤチムンを通して高齢者と地域子ども会との交流の機会を図っていきたい。

(6) まとめ

読谷村においても、自治会の加入・未加入問題があり地域コミュニティの希薄化が危惧されているが、今後も公立公民館と自治公民館が連携・連帯し公民館活動を積極的に支援し、高齢化社会に対応できる環境作りを行うとともに地域人材の育成が図れるように努めていきたい。

3 サークル委託講座

(1) 講座の概要

ふれあい交流館（従来の中央公民館の機能・理念を保持）は、住民の多様化、高度化する学習ニーズに応じて、いつでも、だれでも、気軽に学習できる体制・学習要求や生活課題を取り入れた事業に積極的に取り組んできた。平成21年度より従来の募集・企画・運営・実施の講座を変更し、新たな事業展開として1部事業を既存サークルに自主運営講座として委託した。委託した主な理由は住民サービスの低下防止、サークルの活性化、予算（報償費）の削減。

(2) 講座のねらい

本講座は、ふれあい交流館に登録されているサークルが講座を通して地域住民に学習機会を提供する目的で開設された。

(3) 活動の内容

◎ 講座の開催要領

- 期 間：毎年5月～12月
- 委託数：4サークル（平成21年度）
（ダンススポーツ・着付け・フォークダンス・太極拳）
- 時 間：2時間程度
- 受講者：各定員20名

(4) 活動の評価・成果

- ① サークルが積極的に受講者に関わり、今までの講師対受講生の構図がサークルと受講生に代わり、互いのスキルの向上や親睦・交流の場として新たな生涯学習の体制確立が図られた。
- ② 限られた施設におけるサークル数が抑えられ有効活用が図られた。サークル員の声かけで多くの村民が集まった。
- ③ 報償費（予算）が抑えられた。サークルの自主運営により職員にゆとりが生まれた。

(5) まとめ

財政が厳しく、従来の講座運営が難しくなる中で、日頃から施設を活用しているサークルに自主運営の講座を委託、ふれあい交流館と連携した新たな事業運営の取り組みを行った。自主的に関わることでサークルの活性化にもつながり、今後の生涯学習促進の一端を担うものになると考える。

第5分科会 地域づくり

討議のテーマ

地域コミュニティの活性化をめざす 公民館活動の在り方

・ 討議の柱

- ① 地域の特性を活かしたまちづくりをめざす公民館活動の在り方について
- ② 地域の諸団体や関係機関と連携した地域づくりに向けた公民館活動の在り方について

・ 助言者

福岡県教育庁教育企画部社会教育課 社会教育班長

井上 智朗

・ 司会者

沖縄県浦添まちづくり元気ネットワーク 会長

大濱 勝彦

・ 事例発表者

福岡県北九州市立高槻市民センター 館長

沖縄県NPO法人地域サポートわかさ公民館 事業部長

本原 和子
宮城 潤

・ 記録者

沖縄県教育庁中頭教育事務所 社会教育主事

沖縄県沖縄市立中央公民館 公民館主事

甲斐 達二
島袋 智子

・ 運営責任者

沖縄県教育庁生涯学習振興課 指導主事

宇都宮 幸雄

・ 会場責任者

沖縄県那覇市若狭公民館 館長

津嘉山 剛

地域の自然や人材を活かしたまちづくりの実践

福岡県北九州市立高槻市民センター 館長 本原 和子

1 はじめに

福岡県北九州市では、平成6年度から地域住民の連帯感と自治意識の高揚を図り、心豊かな地域社会づくりを行うことを目的にしたまちづくり協議会の設置を促進しています。そして、その地域活動の拠点として「市民福祉センター」の整備を進め、既存の公民館についても、市民福祉センターとしての機能を付加して活用してきました。平成17年1月に、「市民福祉センター」と「公民館」を統合して、名称が「市民センター」に変更され、小学校区に一つ配置されています。

高槻市民センターは、八幡東区にある高槻小学校区のセンターとして、平成13年4月に開館（当初の呼称は「市民福祉センター」）しました。

高槻まちづくり協議会は平成13年1月に結成され、現在8部会・6委員会で構成されています。

高槻小学校区は4自治区会9町内で、世帯数1,574、人口3,423人で、世帯数・人口とも漸次減少傾向にあり、高齢化率は35.3%で、高齢化に伴う多くの課題を抱えています。また、住宅の多くは斜面に建てられ、急な坂道が特に高齢者の日常に大きな支障をきたしている地域です。

市民センターのすぐ横には、ほたるの住む清流「槻田川」が流れており、夏になるとまちづくり協議会主催の“たかつきほたる祭”が開催され、連日ほたるの見学者で賑わいます。少し奥に入ると里山の原風景が広がり、人と自然が融合された穏やかな環境にあります。

更にこの地域には、まちづくり協議会を始めとして民生委員、福祉協力員、保護司、少年補導員、安全パトロールの皆さん等のボランティア活動も活発で、地域のために何かをするという「支え合い、助け合い」の精神が息づいています。

2 活動の内容

(1) 活動のねらい

- ① 地域の恵まれた自然や人的環境を活かした活動を計画・実践して、より一層、自然・人・地域の繋がりを深め、地域力を高める。

- ② 人としての柔らかな感覚が育つ子どもたちに豊かな体験活動を提供して、子どもの健全育成と地域の教育力の醸成に努める。

(2) 活動の実際

① 里山の自然を活かしたまちづくり

校区の最も奥に位置する猪倉町は戸数40の過疎の集落です。住宅地が大半を占める校区の中で唯一、里山の原風景をとどめた地区です。

まちづくり協議会は、平成17年度から、まちづくり協議会に「里山を守る会」（現在は里山の会）を組織し、休耕田を利用したそば栽培に取り組んできました。この活動は、市民センターとまちづくり協議会がこの地域の自然環境を活かしたまちづくりについて学習会を行う中で、センター講座として開催していた野菜作りを学ぶ「農文塾」をヒントにしたものです。

会員は、「農文塾」の受講者、農作に興味のある人、まち協や地元の人等32名が集まりスタートしました。

18年度からは新たに枝豆・大豆も始め、春は枝豆・大豆を行い、夏から秋はそば作りを行い、今年で6年目を迎えています。



猪倉の里山での作業風景

収穫した枝豆は地域の人に提供し、大豆は味噌作りに使います。そばはそば打ち講座を開き、自分たちで打てるように勉強して、センター・まち協行事の時、その腕前を發揮します。さらに地域に呼びかけて、枝豆やそばの「収穫祭」を開催しています。

② 高槻子ども体験教室の取り組み

本活動は当初、センターが平成16・17・18年度の3年間、文科省の委託事業「地域子ども教室推進事業」を受けて、高槻小学校1年から6年生の児童（希望者）を対象に行いました。委託期間が終わった平成19年度に「将来、まちづくりの核となる子どもたちを、地域ぐるみで育てていこう」と、まちづくり協議会組織への位置付けをセンターから働きかけて「高槻子ども体験教室委員会」が発足し、まちづくり活動の一環として取り組むことになりました。

委員会のメンバーは、センター館長、センターに配置されている生涯学習推進コーディネーター、まちづくり協議会の各部長、センターボランティアグループ、センタークラブの方々で、活動内容や協力体制等について検討します。活動内容は次の6つの視点から計画しています。

- I 地域の自然に親しむ活動をしよう。
- II 地域の行事や活動に参加しよう。
- III もの作りに挑戦しよう。
- IV 地域の施設に出かけよう。
- V 伝承遊びに挑戦しよう。
- VI 卓球に挑戦しよう。

実施日は、下校時間が早い水曜日、休日の土・日曜で随時実践しています。実践にあたっては、例えば川の教室はまちづくり協議会保健環境部会、陶芸教室はセンター陶芸クラブ等活動内容に関連するまちづくり協議会部会やセンタークラブ、ボランティアの皆さんが関わる様になっています。

少子高齢化が進んでいる地域ですが、21年度の年間の参加児童は延べ670名、関わった大人は延べ399名で、子どもたちは地域の自然や人との出会いを広げています。



郷土の槻田川での川の教室

3 活動の評価と成果

里山の自然を活かしたまちづくり

里山の自然を活かし、人の輪を拓けるこの活動を、まちづくり協議会が組織的に行き、コミュニティの活性化を図っていることに大きな意義があると考えます。

里山の会の活動は、過疎が進んだ山あいの小さな集落に賑わいを生み出しました。農業の素人である町の会員に集落の高齢者が手ほどきし、一緒に汗をかく中で培われた絆は、地元の高齢者に生きがいを与えています。また、地元の小学校の校外活動に取り入れられ、最近では、近隣地区の二つの医療機関が患者や職員のための野菜作りを始めるなど、着実に人と人とのつながりを拓けています。

過疎のまちの抱えるもう一つの課題は空き家の増加です。この町では、文化や福祉の風薫るまちづくりを志向し、障害者のための紙すき工房、北九州市の伝統織物（小倉織）に空き家を提供するなど、意識的にまちの再生と魅力作りに取り組んでいます。

人・自然・農・物作り・文化・福祉・・・多様なキーワードを持ったまちづくりがこの「里山」から発信されようとしているのです。

市民センターがその活動を保障し、条件整備をし、地域活動の拠点としての役割を果たしていくことを再認識させられたことは成果でした。

高槻子ども体験教室の取り組み

子どもたちがこのまちは楽しいな、やさしいなと思えるまちづくりは地域の願いです。この願いを共にした地域の多くの大人たちがかかわることで、地域ぐるみで子どもを見守り育てていこうとする風土が出来てきました。そして次世代を担う子どもたちに、今を生きる大人の背中を見せてくれました。子どもたちも大人に対して信頼感をもち、地域への愛着を深めることができました。

4 今後の課題

地域の特性を活かして、地域の活力を高めるまちづくりをこれからも繋いでいきたいと思います。しかし高齢化が進行する中で、それを支える人材確保が難しくなっています。人材育成はまちづくりの要です。地域活動の拠点として市民センターは、どのように人材育成に力を注いでいけばよいか今後の課題です。

「地域とともに歩む公民館活動」

沖縄県那覇市若狭公民館受託団体地域サポートわかさ公民館事業部長 宮城 潤

1 はじめに

(1) 若狭公民館の概要

- ・那覇市人口：315,864人
- ・若狭公民館：那覇市の東に位置し、管轄する地域の人口3万8千人、小学校3校、中学校2校
- ・施設：ホール、第一研修室、第二研修室、第三研修室、和室、実習室
- ・運営：平成4年6月3日開館。平成16年度から21年度まで6年間、公募による非常勤館長を配置した。平成22年度より公民館業務の一部を「NPO法人地域サポートわかさ」に委託している。館長（市職員）1人、臨時職員1人、NPO職員5人、計7人体制で運営。公募館長、その後の地域団体への一部業務委託により地域との関わりが深くなってきている。
- ・NPO法人地域サポートわかさ：自治会、学校、市民、地域関係団体で組織。公募館長の提案により、前身は平成17年3月の「地域でしゃべり場」の後に組織。公民館の業務委託にあたり、地域で公民館運営をするため平成19年11月にNPO法人化した。

2 活動の内容（活動事例）

(1) 地域連携事業

ア 若狭地域文化祭（平成9年度～）

地域住民、関係団体が連携・協力して企画実施。三世代間の交流と地域の連帯意識の強化を柱に、地域文化を再認識、青少年の健全育成、活気に満ちた潤いのある地域を創ることを目的とする。参加者3200人。

イ 若狭クリーン・グリーン・グレイシャス運動（平成17年度～）

自治会、婦人会、小中高生、PTA関係者を中心に、一丸となって若狭地域にある公園の年末清掃を行なう。またプラスワン活動として豚汁を食べながらの交流会を実施。参加者280人

ウ 新春もちつき大会（平成7年度～）

地域住民の交流と親睦を深める事を目的にもちつき大会を開催。参加者330人

エ 若狭公民館まつり

若狭公民館で活動しているサークルの日頃成果を発表・展示。「地域まつり」的な性格をもつまつりとした。参加者のべ3815人

オ 学校・児童館との連携事業

「若狭小学校50周年記念壁画作成」、「若狭児童館30周年記念壁画作成」

(2) 青年の公民館活動・地域活動への参加促進

「WCPF合宿」、「NAHAユースフォーラム」、「若狭海浜公園活用大作戦」、「朝食会」、「100人でだるまさんがころんだ」

ア 朝食会（平成19年11月～）

平成19年度に若者の視点で公民館の活用法について考える「わかさ現代企画製作所WCPF合宿：観・話・食・泊・ライブ」を実施。「公民館を使って下さい。」というキャッチフレーズのもと集まった青年たちと公民館施設の役割や可能性を提案するというワークショップで出てきた案を実現する形で「朝食会」を実施。青年のほか、地域にお住まいの方が参加し、異年齢の交流をしている。

イ 100人でだるまさんがころんだ（平成21年度～）

朝食会参加者からの「若狭海浜公園野外ステージがあまり利用されていない。何かできないか」という意見をきっかけに企画が生まれた。大型旅客船バース建設をはじめ、ウォーターフロント開発により大きく姿を変える若狭海浜公園で多世代が楽しめるイベントを20～30代の「朝食会」メンバーが企画・運営を行い、公民館は側面支援を行う。

(3) 児童・生徒を絡めた地域づくり

ア ちっぴる若狭（平成18年度、平成22年度）

地域各機関と連携し、地域活動やボランティア

ア活動に参加した児童には、対価として子ども地域通貨「ちっぴる」を支払う。平成22年度は若狭地域文化祭と連携し、祭で実施される様々な体験活動やバザー物品等を購入する際に使用できるものとする。子ども達が主体的に関わることにより、子ども自身が地域社会の成員であることを自覚し、地域行事に積極的に参画できるよう促す。また、「ちっぴる」により、地域活動やボランティア活動の顕在化と地域の多様な大人との関わりの中で、就業意識の向上を目指す。

イ スージグラー看板設置事業（平成19年度～）

本事業はNPO法人地域サポートわかさ、若狭公民館、若狭小、各自治会及び地域住民の案内で若狭の歴史、道の特徴や故事来歴に耳を傾けながら郊外活動を進めた。児童がネーミングを考え、理由を納得いくまでグループ討議し推薦、決定するという手順で進め、通学路にスージグラーの表示板を作成した。

(4) 地域の魅力を再認識する事業

「若狭を走っていた電車から歴史をたどる」

「目からウロコの若狭まち歩き」

「日常生活が100倍楽しくなる！まちMAPづくり」

「比嘉座わかさ公演」

(5) 地域学習支援事業

地域の団体が行う社会教育活動のうち、地域に根ざした生活課題、教育、芸術及び文化に関するもので講師を招聘し学習する事業に対し、講師を派遣することで地域教育活動を支援する。

(6) 地域情報の発信

ア 公民館ホームページ

多種多様な取り組みや地域情報をできるだけ早く紹介し、頻繁に更新している。公民館や地域の情報を得るためのアクセスが増加している。（平成22年1月第3回全国公民館ホームページコンクール最優秀賞を受賞）

イ 若狭公民館館報「広報わかさ」

公民館主催事業の案内や報告、地域情報や人物紹介などを掲載している。新聞配達店（6店舗）の厚意で、新聞折込により地域4650世帯ほかに配布。A4サイズ4頁

発行部数：6,000部 発行回数：年6回

3 活動の評価・成果

- (1) 地域連携事業を多く実施した事で、地域の団体や人材とのネットワークが図れるようになってきている。頼り頼られる関係が構築されてきている。また公民館に気楽に出入りできる雰囲気が出来た。
- (2) 青年層の公民館や地域への関わりが希薄だったが、青年のための講座・事業を継続的实施することにより、公民館利用が進んできた。自主運営のイベントを企画・実施するようになった。
- (3) 広報に力を入れた事により地域情報の共有化や新たな人材の発掘が図れた。

4 今後の課題

- (1) 地域課題を解決する拠点づくり

ア 自治会加入率が低いなかでの地域コミュニティの活性化

- (2) 新たな人材の発掘

男性や青年層の一層の参加促進

- (3) 公民館から離れた地域への支援活動

地域学習支援事業の充実



若狭地域文化祭



100人でだるまさんがころんだ

第6分科会 平和教育（フィールドワーク）

討議のテーマ

平和を希求し発信する明るい社会の実現に向けた 公民館活動の在り方

・ 討議の柱

【住民参画型の平和学習を創造するための平和散策】

・ 発表者

沖縄県沖縄大学・沖縄国際大学 非常勤講師

波 平 エリ子

・ ガイド

沖縄大学壕プロジェクト
沖縄国際大学壕プロジェクト

・ 記録者

沖縄県教育庁生涯学習振興課 社会教育主事
沖縄県立玉城青少年の家 主任専門職員

新 島 英 樹
新 垣 剛 志

・ 運営責任者

沖縄県那覇市中央公民館 職員

堀 川 恭 登

・ 会場責任者

沖縄県那覇市繁多川公民館 館長

宇 根 克

壕プロジェクトの活動

— 大学と公民館講座の連携から —

沖縄大学・沖縄国際大学非常勤講師 波平 エリ子

1. はじめに

今から5年前、大学と地域との交流の一つの試みとして、沖縄大学での講義と那覇市立繁多川公民館の市民講座という二つの講座を連携させて、学生と社会人が一緒になって、地域の歴史や民俗文化を学んだり、あるいは新たに掘り起こすことを目的に、講座を開講いたしました。昔の地域の人々の生活や生業、年中行事など様々な事柄をテーマにして、地元の繁多川自治会々員のなかの比較的年配の方々にインフォーマントとなって頂き、とても充実した講座を二年半の間続けることができました。

沖縄では、地域の歴史や民俗などをテーマにすると、どうしても沖縄戦の問題に突き当たります。繁多川地域やその周辺にも、住民が避難した幾つかの壕があります。なかでも、通称「県庁・警察部壕」という、沖縄戦の最中に当時の県庁中枢が移動し、沖縄県知事や警察本部長を中心とした職員・署員が利用した壕があります。しかし、そのことについては、県内でもあまり知られていず、また戦後65年が経ち辺りの景色も一変したこともあって、地元でも長い間忘れさらられていました。

しかし幸いなことに、自治会会員の一人に知念堅亀氏というその壕のことについて詳しい方がおられ、元県庁職員遺族の方や一部研究者に対して壕の案内をなさっていました。その方にインフォーマントになって頂き、実に多くのことを学ぶことができました。

2006年、「県庁・警察部壕」を平和学習の場として活用し、風化していく戦争の記憶を次の世代に繋いでいくことを目的に、公民館の協力も受け『壕プロジェクト』という企画・団体を立ち上げ、沖縄大学や沖縄国際大学の学生、卒業生、一般社会人を含むメンバーで活動を続けています。

2. 活動内容

沖縄戦が激化する中で、県庁中枢が泉崎から移動した経緯や、県知事や警察部長をはじめとする職員・署員の壕内での生活、その後の沖縄本島南部、摩文仁への避難に至るまでを中心に、沖縄戦の経過について学ぶとともに、避難経路の足跡を巡検したり、元職員、署員の戦争体験の聞き取り調査、さらには壕周辺の環境美化などの活動を行っています。

そうした学習や巡検の成果をもとに、高校生や大学生その他の諸団体への壕ガイドが活動の中心となっていますが、シンポジウムでの報告やパネル展開催等の活動も行っています。以下に、これまで行った壕ガイドを掲げておきます。

2006年

- 10月 那覇市立繁多川公民館成人講座「繁多川見聞録」にて壕ガイド
- 11月 沖大祭にて壕ガイド

2007年

- 12月 識名小学校六年生親子学習会において室内壕ガイド
- 12月 沖大谷口正厚先生のゼミ生を壕ガイド

2008年

- 1月 那覇市社会教育指導員を壕ガイド
- 4月 元警察練習生の宮城氏から聞き取り調査と壕ガイド
- 5月 沖縄県立真和志高校生をガイド
- 5月 沖大加藤彰彦先生・宮城能彦先生のゼミ生を壕ガイド
- 8月 第436回沖縄大学土曜教養講座『沖縄戦は終わらないpart 2』（沖縄大学・早稲田大学ジャーナリズム教育研究所主催）にて室内壕ガイド
- 8月 那覇市立石田中学校教職員研修にて壕ガイド

- 8月 沖縄大学・京都精華大学連携講義
「沖縄ショートプログラム」において壕ガイド
- 10月 那覇市立歴史博物館・沖縄大学協働公開講座
「那覇歴史ものがたり」において壕ガイド
- 11月 沖大祭において壕ガイド（2日間）
- 12月 沖大山代ゼミを壕ガイ

2009年

- 3月 沖縄県立第一中学校一条会（元鉄血勤皇隊・通信隊同窓会）を壕ガイド
- 5月 沖縄県立普天間高校生を壕ガイド
- 7月 沖縄県立平和記念資料館主催『新収蔵品展企画展』において「沖縄戦を語り継ぐ若人たち～壕が伝えるメッセージ」で室内ガイド
- 8月 京都精華大学・沖縄大学の連携講義
「沖縄プログラム」において壕ガイド
- 11月 沖大祭および那覇市教育委員会公民館「青年のための講座交流事業」において壕ガイド
- 11月 沖縄県立平和記念資料館にて壕プロジェクトパネル展およびワークショップにて室内ガイド（小学生向けガイド）

2010年

- 6月 元警察部署員、宮城弘氏遺族の大城多美子さんはじめ字真地婦人会を壕ガイド
- 9月 五大学の「沖縄プログラム」において壕ガイド

3. 成果

学生よる壕ガイドは、近隣の小・中・高校の総合学習、教育委員会職員研修や公民館や博物館での講座、大学での授業・学園祭等において、平和学習や地域の歴史学習の機会として利用されており、現在までに私たちの壕ガイドを受けた人数は600余名になります。

4. 今後の課題

大学生が活動の主体となっているため、学習の成果をいかに蓄積し、活動を継続するためのメンバーをいかに確保していくのか、という課題を抱えています。また、「沖縄戦」や「平和」の問題に関心はあっても、他にも参加したい課外活動を持っていたりして、この「壕プロジェクト」に専念できるメンバーが少ないという現状にあり、この会で活動すること自体の魅力をいかに増していくかが課題となっています。

また、戦後65年が経ち、「県庁・警察部壕」の中に避難した元職員やその遺族からの聞き取りが年々難しくなっている点も課題の一つとしてあげられます。関係者への一刻も早い聞き取り調査の必要性を強く感じているところです。



第7分科会 自治公民館活動（都市型）

討議のテーマ

豊かな地域づくりを担う自治公民館活動の在り方

・ 討議の柱

- ① 自治意識・連帯感を高めるための組織・運営の在り方について
- ② 住民の生きがいづくりを促進するための講座とその運営の在り方について

・ 助言者

熊本県尾当公民館 館長

加藤 貴司

・ 司会者

沖縄県社会教育 委員

森田 弘美

・ 事例発表者

熊本県長嶺1町内公民館 館長

浦添市内間自治公民館 館長

中原 啓司
知念 孝

・ 記録者

沖縄県教育庁国頭教育事務所 社会教育主事

沖縄県与那原コミュニティセンター 主事

島川 直樹
宮城 結

・ 運営責任者

沖縄県浦添市立中央公民館 館長

渡久山 ヤス子

・ 会場責任者

沖縄県浦添市立中央公民館 公民館主事

石坂 ひとみ

地域をつなぐ公民館活動

熊本県熊本市長嶺校区 第一町内公民館 館長 中原 啓 司

1 はじめに

(1) 長嶺校区の概要

熊本市の東北部に位置し、人口約8万人の託麻地区6校区の中では長嶺校区が一番新しく、長嶺小、長嶺中学校が平成3年4月に開校した。小学校区では自治協議会が活発に運営されている。

国体道路を中心に、近隣に日赤病院、県立大学、老人養護施設、その他生活に必要な諸施設も整い、住みやすいという評判から人口増加が続き、約1万5千人が住んでいる。

(2) 公民館の概要

町内のほぼ中央に公民館がある。ホールは約72㎡、他にトイレ、厨房、ステージ、物置、倉庫などがある。

役員は館長、副館長、主事、会計からなり、自治会と連携しながら活動している。資金は利用料金と自治会からの補助により運営している。

2 公民館活動のねらい

急激な人口増加に伴い、住民のコミュニケーションの希薄化を阻止し、より親密な校区づくりを進めることを目的に、関係機関と連携し取り組んだ。

- ① 地域住民がこれまで自ら学んできたことを地域に還元し、生きがいをづくりを行うこと。
- ② 子どもたちと地域住民が、共に参加し協力を必要とする事業を行うこと。

3 活動の内容

表1に年間の主な行事予定を示している。主催事業は公民館が実施し、共催事業は自治会と一緒に企画のうえ実施している。

(1) 学習クラブ活動

公民館利用者は自主的に学習クラブを結成し、それぞれクラブの代表者を設けて活動している。

表2に示すとおり、現在13のクラブで143人のクラブ生が活発に活動している。

中でも、パソコン教室では老若男女を問わず、全

くの素人から参加し、中には90歳を超えた人もいて、今ではかなり上手になっている。

表1 表には主要項目のみ記載

月	主催事業	共催事業
4	役員会、代表者会議	定期総会
5	館内外清掃	公園・花壇除草
6	役員会、代表者会議	一斉清掃 災害点検
7	お出かけ公民館講座	校区夏まつり
8	備品チェック	夏祭り、防災訓練
9	お出かけ公民館講座	臨時総会、敬老会
10	ステージ発表	体育体会
11	作品展示会	ふれあい講座
12	館内外清掃	餅つき大会
1	お出かけ公民館講座	新成人祝賀
2	オリエンテーリング	ふれあい講座
3	役員会、監査	町内花見

表2 学習クラブ名と会員数

※会員の町内外の割合はほぼ半々 ※ 表中の書道は児童主体

クラブ名	男性	女性	合計
囲碁	20	3	23
絵画	0	4	4
カラオケ(1)	5	12	17
カラオケ(2)	1	10	11
カラオケ(3)	0	8	8
健康体操	0	5	5
三味線	0	5	5
書道	3	8	11
太極拳	0	20	20
日舞	0	4	4
パソコン	2	7	9
ヨガ	1	20	21
リズム体操	0	5	5
計	32	111	143



ひと休みするパソコン教室の様子

なお、公民館で勉強した各クラブの成果を年に一度発表する場として、ステージ発表を行っている。会員の他にも町内外の見物客を迎え、和やかな雰囲気になる。中休みにはヨガの先生が見物客へ基本ポーズを教え、心身のリラックスを図っている。

(2) お出かけ公民館講座

公立公民館で用意された「お出かけ公民館講座」の中から、種々の内容の講座が学べる。

当公民館でも「布ぞうり作り」、韓国料理、その他古着のリサイクルなど勉強し好評である。

(3) 作品展

学習クラブで学んだこと、また町内外の有志、老人施設入居者などの力作を公民館に展示、町内外から多くの見物者が訪れる。



作品展と見物者

(4) ふれあい活動

ア 街かどオリエンテーリング

8つの町内にポイントを設け、子ども、おとなが好きなコースから巡回し、ポイントごとに簡単なゲームをしてもらい、スタンプを押す。同じ校区内でも普段はほとんど行ったことのない場所、知らなかった名所など発見、汗をかきながらの半日である。

イ 年末餅つき大会

廃材を利用した薪、蒸籠（せいろう）、石臼、杵など昔ながらの伝承によるお祭り。中でも臼の中の熱い米を手で捏ねる技術は、地域の長老が手ほどく。園児もおじいちゃんと杵で搗く。搗き終わったら館内で餅を丸める作業が行われる。

搗きたての餅を子どもと一緒に独居老人宅などへ配るが、喉に詰まらないようにと不安も走る。

ウ 夏まつり

公民館が建っている長嶺公園は約1万㎡の広さがあり、ここで1町内主催の祭りを開く。建築関係の人たちの応援を得て、鉄パイプで舞台ができる。

町内外の幼児から高齢者まで多くの参加者を迎え、園児たちによる開会セレモニー、子どもたちの簡単なゲーム、アトラクション、出店などで賑い、熊本の蒸し暑さを忘れ去ることができる。

(5) 防災訓練、危険個所の点検

町内を流れる健軍川は流れも少ない小川であるが、

一旦雨が降れば急流となる。数年前には市役所の職員が勤務中に流される悲劇も発生した。

特に梅雨時は道路が冠水、路側の損壊など心配である。町内役員、有志による危険個所の点検、土木事務所との連携により、事故防止に取り組んでいる。

また、公園、小学校グラウンドが災害時の一時避難場所に指定されているので、消防署による災害、火災に関する講話、消火訓練、地震体験車なども準備し災害の未然防止に取り組んでいる。

(6) 環境美化・清掃

春、秋の2回行われる熊本市の一斉清掃に町内も同調し、子どもから大人まで周辺、一般道路側、公園などの清掃、美化を行っている。特に公園には園児、子どもたちが集まるので、花壇の手入れ、園内の美化、安全に努めている。

(7) 公民館のIT化

公民館活動の取り組みを広く周知するため、市内に400ある地域公民館の中で、当公民館はいち早くIT化を図った。町内の行事結果などブログ発信し、遠方に出ている関係者に喜んでもらっている。

(<http://nagamine1.exblog.jp/>)

4 評価・効果

地域のつながりを軸に取り組んだ効果を次のとおり感じた。

- ① 新興住宅地であり、転入者が増えるなか地域との関わりができ喜ばれた。
- ② 地域内での「会話」が増えた。
- ③ 地域交流をとおして、大人と子どもが親密になっていった。
- ④ 子どもたちが登下校時に「挨拶」するようになり、「言葉遣い」もよくなったようだ。

5 今後の課題

確かに地域住民のコミュニケーションが図られる方向には進んでおり一定の効果は生まれた。

しかし、日常的な公民館利用者は固定した感があるので、新しい利用者が気軽に利用できる工夫が必要である。特に男性や若い世代の住人が、参加できるような事業が必要と感じた。

今後とも、子どもたちと保護者を巻き込んだ事業を計画的に実行していく必要を感じた。

「地域住民がほこりのもてる自治公民館活動」 ～ “内間こいのぼり祭り” の取組を通して～

沖縄県浦添市内間自治公民館 館長 知念 孝

1 はじめに

(1) 自治会の概要と紹介

- ① 内間自治会は、浦添市の南西に位置し、安謝川を境に那覇市の新都心に隣接している。戦後昭和21年には人口384人、95世帯の農村部でしたが都市化が進み現在人口9,869人、3,850世帯で浦添市の40自治会で最も大きいマンモス自治会となっている。
- ② 地域内には、小中高校が1校ずつあり、近隣には4高校・1専門学校があって比較的に子どもが多い地域である。
- ③ 高齢化率は14.2%で比較的若い人が多い。

(2) 自治会の目的

- ① 安心安全なまちづくり
- ② 誇りがもてるまちづくり
- ③ 花と緑と景観のあるまちづくり
- ④ 小中学校との連携と青少年の健全育成
- ⑤ 要援護高齢者の支援
- ⑥ 各団体の地域活動の充実発展

(3) ねらいを推進する組織・団体

自治行事を開催する時には、6専門部の評議員会で企画立案し、8団体が役割分担して推進する。

途中調整会議で進捗状況・問題点を話し合い共通理解のもとに活動していく。

※6専門部（総務部・青少年健全育成部・環境美化部・健康スポーツ部・福祉部・安全部）

※8団体（校区子ども会・青年会・婦人会・老人会・OB会・獅子舞保存会・コミュニティースポーツクラブ・美らしまサポーター協議会）

2 具体的活動内容

(1) 内間こいのぼり祭りのねらい

次代を狙う子ども達に喜びと感動を与え、ふるさと内間の素晴らしさに誇りを持ち、強くたくましく生きる子ども達を育成する。



内間こいのぼり祭りの様子

(2) 基本的な考え方

- ① 手作りのこいのぼりとする
- ② 保育園・幼稚園・小学校の全児童が製作する
- ③ 一世帯一匹を目標とする。
- ④ 掲揚場所は、安謝川・公園を中心とする。
- ⑤ 掲揚は、自治会団体を中心に近隣住民で取り組む。

(3) 取り組みの流れ

- ① 企画委員会
各部長で構成し、基本的な考え方の確認及び反省に基づき企画立案する。
- ② 評議員会
議決機関であり、企画委員会で計画したものを審議する。
- ③ 実行委員会
関係機関、団体の代表者に実施計画や予算について説明し、協力を依頼する。
- ④ 実施本部
製作依頼回収部、掲揚降納部、イベント部、安全救護部、広報部の5部を設置する。
ア 各団体を業務内容に応じて適正に配置する。
イ 日程表に基づき取り組み
ウ 途中2回調整会議し、進捗状況、問題を調整する。

(4) 各部の取り組み

① こいのぼり製作依頼回収部

ア 製作部は、こいのぼりの研究指導原型の製作を行う。

イ 依頼回収係は、依頼先・製作数・回収日を決定する。

ウ 製作係は、こいのぼりの製作を含め全体的な掲揚数を決定する。

(ア) 第 5 回手づくりこいのぼり祭りは、2 月から 4 月 20 日までに 3, 200 匹を製作し下記に依頼した。

施設名	鯉のぼり数 (匹)
保育園 (16)	6 4 0
幼稚園 (2)	1 6 0
小学校	7 2 0
通り会	8 9 0
ボランティア	8 3 0

(イ) 掲揚数 4, 200 匹のうち 1, 000 匹は前回のこいのぼりを補修する。

(ウ) 関係団体は、婦人会・老人会・通り会・おせっかいばあちゃん・ボランティアが担った。

② こいのぼり掲揚降納部

こいのぼり掲揚場所・掲揚者と数

掲揚場所	掲揚者	数
内間小学校正門及び周辺道路	スポーツクラブ・青年会・内間小学校 P T A・通り会・ボランティア	1, 200
地域内道路	通り会・保存会・ボランティア	980
安謝川	O B 会・婦人会・老人会・保存会・ボランティア	900
公園内	婦人会・O B 会・ボランティア	460
公園内掲揚式場 (保育園)	婦人会・O B 会・老人会・ボランティア	640

③ イベント部

子ども中心のイベントとして、司会進行、舞台出演者は地域の子も達を中心となっていた。

自治会全体で取り組み、特に出店は各団体の特色が生かされていた。



園児によるこいのぼり製作

3 活動の成果

- (1) 一自治会の住民が 4, 200 匹を掲揚できたことに自信と誇りを持ち、地域のすばらしさを認識した。
- (2) 初回は『美らまち夢プラン賞』の受賞の助成で開催した。しかし、2 回目からは住民の自発的な寄付で運営することができた。
- (3) こいのぼり祭りをとおして住民の連帯感、地域力が高まった。
- (4) 地域住民と小学校との連携がより深まった。
- (5) 5 月の連休が終わった後も、他地域の保育園、幼稚園、小学校の遠足、家族でのこいのぼり見学で賑わった。

4 今後の課題

- (1) 製作部の高齢化に伴う若い人材の確保
- (2) こいのぼりの管理
- (3) 他地域との連携
- (4) 一世帯一匹のこいのぼり製作活動の定着
- (5) こいのぼり製作の更なる工夫

第8分科会 自治公民館活動（農・山・漁村型）

討議のテーマ

豊かな地域づくりを担う自治公民館活動の在り方

・ 討議の柱

- ① 自治意識・連帯感を高めるための組織・運営の在り方について
- ② 住民の生きがいづくりを促進するための講座とその運営の在り方について

・ 助言者

佐賀県教育庁社会教育文化財課社会教育推進担当 係長

今 泉 徹

・ 司会者

沖縄県NPO法人地域サポートわかさ 理事長

早 川 忠 光

・ 事例発表者

佐賀県唐津市巖木公民館 館長

山 口 恭 弘

沖縄県読谷村高志保自治公民館 館長

松 田 正 彦

・ 記録者

沖縄県教育庁生涯学習振興課 指導主事

知 念 賢 世

沖縄県立石川青少年の家 主任専門職員

岩 本 利 章

・ 運営責任者

沖縄県読谷村ふれあい交流館公民館 主事

上 里 竜 一

・ 会場責任者

沖縄県金武町立中央公民館 公民館主事

末 吉 豪

豊かな地域づくりを担う自治公民館活動の在り方

佐賀県唐津市巖木公民館 館長 山口 恭 弘

1 はじめに

(1) 巖木町の概要

唐津市は佐賀県の北西部に位置し、巖木町は唐津市の最東南部にあり、町域は東西11.4km、南北13.4km、総面積61.27km²。佐賀市と唐津市を結ぶJR唐津線のほぼ中間点にあり、佐賀駅まで40分、唐津駅まで30分のところにあります。主要国道203号線の沿線で、一級河川巖木川（松浦川）が貫流しています。

近年の人口は約5,000人、高齢化率は32.86%です。大正期は地下資源の石炭産業で急速に栄え、2万2千人を超える人口であったが、昭和40年に閉山となり町民の多くが東京や大阪へ転出し、急速に人口が減少しました。

町内の地域を大別すると、主要国道沿いの地域と農山村地に分けられます。主たる産業は農業・（米・柑橘類・ハウス野菜・花卉・お茶等）の複合栽培と林業が中心で、総面積の大部分を占める山林は手が届かず放置された状態となっています。また、農家は高齢化と後継者不足が課題となっています。

行政区は19地区に区分され、それぞれに自治公民館施設があり、内16地区が自治公民館長を専任し運営を行っています。

(2) 実態とねらい

平成11年度（10年前）に比べ、人口は1,000人減の5,000人へ、また世帯数は約2,000戸から約100戸減の約1,900戸となりました。高齢化率は27.7%から32.9%へ5.2ポイントも高くなっています。これらの数値から分かるように、少子高齢化の進行や過疎化の進展は、一戸あたりの構成人数の減少、高齢者世帯の増加及び独居世帯の増加は、周囲の豊かな自然の維持や活力ある生活環境づくりに多くの問題を生じさせ、地域づくりにおいても大きな課題となっています。

このような地域課題を抱えたまま、平成17年に旧唐津市と合併しました。これは行政機能が集約されただけでなく、住民一人一人の発想の転換と自らが自立した地域づくりの主体者となることが求められたものでした。

昔は協力しないと生きていけない時代、お互いに助け合う心、地域で生きていくための連帯感や一体

感がありました。昔の「よさ」を見つめ直し、郷土愛を源にした「地域コミュニティ活動」を確立させて地域の活性化を図ることが重要な課題となっています。

このような中、自治公民館に対し公立公民館の立場から一定の指導・助言・活動支援は行っているものの、問題意識を持って自主的な活動に取り組むことの大切さを自覚してもらうことは容易ではありませんが、今こそ、自治公民館が核となって地域内の各団体やグループと協力し合い、地域の活性化のため一体的に活動することが求められています。

しかし、16公民館は規模的に最小22戸～最大290戸に加え、海拔400m以上の山間部に7公民館が存在するなど、各自治公民館の実態も様々であり、町として一体的に取り組むためには多くの苦勞と工夫が必要となります。

(3) 巖木町における公立公民館と自治公民館の関係

自治公民館は民設民営、自主自立を基本として地域住民に最も身近な親しみある存在です。運営は自主財源を持ち、その拠出は区費より一括入金と毎月公民館費として単独徴収のケースがあります。公民館規模によるが、年間予算は平均約50万円程度（1戸当たり月額500円）。公立公民館からの財政援助は一切ありません。特徴的なことは、公民館長の選出は専任であり、区長とは区別して選出され、位置づけと役割がはっきりしています。

広報活動においては、主に公立公民館が公民館日より（毎月発行、全戸配布）及び町域一斉有線放送を活用し取り組んでいます。また地区では各自治公民館に有線放送設備を持ち、きめ細かく案内・周知に活用されています。



巖木町公民館研究大会オープニング風景

2 活動内容（自治公民館の活性化のための主な活動）

(1) 壮年部

16公民館中12公民館に公民館壮年部を設立し、融和・親睦から始め、地域課題や問題点の共有化、具体的解決のための行動など、地域コミュニティづくりの輪が広がる大きな要因となっています。

構成員の年齢層は40歳～70歳と幅広く、地域活動の中心的存在であり、同時に地域住民総参加による公民館活動を推進する原動力となっています。

一方、壮年部等に所属していない男性は、地域の団体（例えば、消防団・子どもクラブ・育友会・地区理事等）の一部役員を除いて、公民館活動から遠ざかる傾向にあります。団塊の世代と言われる経験豊かな、特技を持った男性達が、地域の中で中心的存在になり、積極的に参画してもらおうよう啓発活動が必要不可欠となっています。また、女性の場合は地域婦人会を中心として、広く活発な活動がなされています。

(2) 公民館運営会議

公立公民館主催で年4回の開催。自治公民館長との最大の接点であるとともに意思統一を図る貴重な場です。地域密着なればこそ、地域の問題を知り、自らの手による解決策も生まれます。公立公民館が扇の要となり16人の公民館長が一体的な相互信頼のもと、年間行事をスムーズに実行するための話し合いや公立公民館からの協力要請を行ないます。

(3) 巡回講演会

自治公民館は「つどう」の面では活発な利活用がなされています。一方「まなぶ」の面では、ほとんど実施されていないのが現状です。自治公民館が自主的に熱意を持って学習会・講演会を企画、開催することを公立公民館がサポートするため、年間6～7公民館を対象に実施の提案、講師の派遣を行っています。

(4) 巖木町公民館研究大会

43年間続く公民館の伝統行事となっています。小学生・中学生による合唱・演劇・踊りの発表や自治公民館による研究事例発表、女性グループの唱歌、地域の専門家による「ふるさと歴史学習会」など、世代を越えた、総合的なふれあいの場として定着しています。

(5) 巖木町教育フェスティバル

毎年6月に「学校・家庭・地域」の連携を図り町民一人一人が教育について考える機会として実施していますが、異世代間交流などにより町民の一体感を創り出し、伝承されてきた「結い」「もやい」の心や温もりのある人間関係の再生、連帯感を深める効果は大きいものがあります。

具体的内容としては、地域の大人が指導者となる

公開授業や町民誰でもが参加できる授業参観、子ども達と一緒に昼食会（大人は自己負担で食券購入）を実施。午後は参加者全員による「全体会」として、課題作品の共同製作や合唱、講演会などを実施しています。

3 活動を通しての評価と成果

(1) 最大の目標である公立公民館と自治公民館の相互信頼関係については一定の成果が上がっていると考えます。また、自治公民館相互の横のつながりも密になってきています。地区を越えた町全体の輪（和）の広がりができつつあるようです。

(2) 地域の抱える課題（問題）の共有化や解決に向けての自治意識の高まり、実施に向けての参加体制（協力体制）などの向上がみられます。壮年部による強力なサポートと既存組織の活性化により、自治公民館は地域の核としての存在感が高まり、心強く活動ができています。

(3) 異世代間・異年齢間交流の機会が多くなったことで、自ずと「お互い顔見知り」の状況が作られ、明るいまちづくり、和み（なごみ）のある生活につながっていくと感じます。

(4) 公民館活動を通じた「連帯感」の醸成は不可欠のものです。自治意識は郷土愛を基盤にした「結い」「もやい」の心を育成することから始まると考えます。

4 今後の課題

(1) 少子高齢化・人口減は避けられない現実です。同時に行政依存からの脱却や自治意識を高めることが大切です。「自治」や「コミュニティ」の言葉だけが独り歩きしないよう、地域づくりのビジョンの作成と共有が重要だと考えます。

(2) 地域が疲弊する危機感を持ち続けながらも、地域のよさや地域の伝統文化、お祭りなど思い出ある地域行事を維持継続することが大切です。

(3) 公民館が地域住民の人間関係やつながりをつくる力と、その原動力としての機能を発揮することが求められています。

(4) 自治意識の向上と活動を支えるボランティア意識の高揚から、地域づくりは始まると思います。



教育フェスティバル授業風景

豊かな地域づくりを担う自治公民館活動の在り方

沖縄県読谷村公民館連絡協議会 高志保区公民館 館長 松田 正彦

1 はじめに

(1) 高志保公民館の概要と現況

① 沖縄県の中央に位置する極東最大の米軍飛行場「嘉手納基地」の隣、読谷村。人口39,586人、13,736世帯、23の行政区があります。

その中で5番目に人口が多い高志保区は、座喜味城跡のふもとから東シナ海方向に傾斜した段丘状に広がり、人口2,919人、975世帯が暮らし、55%にあたる1,605人、480世帯が行政に加入、高志保公民館を運営活用しています。

② 高志保の字民性は戦前から「タカシブイッポー（高志保一方）」と、良く（団結心）も悪く（保守的）も言われていますが、3年前字誌発刊の際制定された字章が示すように

- ・高志保「たかし」をデザイン
- ・円は区民の融和
- ・外円青は海、緑は肥沃な大地
- 文化、歴史と区構成4つの班
- ・右上の円は新住宅地と区の発展



今後更に住宅が増え、人口増加に伴い行政加入が大きな課題であり、発展に繋がるでしょう。

③ 団体組織は、若保の会（65歳以上）・婦人会・青年会・子供育成会・高成会（45歳～64歳までの男性）・体育協会・がじまる会（80歳以上とボランティア）・馬舞（高志保伝統芸能）保存会・古典音楽芸能保存会の9団体と任意団体の生活改善部・山芋愛好会・ソフトボール愛好会・ゴルフ愛好会の4団体があり、区の運営を支え余興出演や各団体活動を楽しんでいます。

2 活動内容

(1) 年間行事

4月：さとうきび満産祝い 5月：学事奨励会
6月：慰霊祭 7月：区民運動会
8月：エイサー 9月：敬老会並びに出生祝い
10月：高志保まつり及び共進会
12月：山芋勝負 1月：生年合同祝い

① 大きな行事は大勢の区民参加で開催され、余興は各団体を中心であり、地謡は古典音楽保存会、ト리는高志保伝統芸能「馬舞」で閉めます。

② 夏の区民運動会は4つの班対抗で行われ、子供から老人まで家族みんなが選手。昼食は500名分のカレーライスを手作り。終了後公民館周辺で各班別の反省会が行われ、運動会での活躍ぶりに子供も大人もみんなで盛り上がります。

③ 秋の高志保まつりは2日間にわたり開催。ゴルフ大会やゲートボール大会。共進会では農作物の審査や展示会。夜は公民館中庭で各団体の出店で飲食を楽しみ、屋外ステージの余興を観覧、または出演。3年前の第15回記念高志保まつりでは、区内企業などの協賛を得て賞品を準備、大抽選会で満員御礼中庭いっぱいの区民で大盛況でした。

④ 12月の山芋勝負は愛好会会員が1年間愛情たっぷりに育てた山芋の重量を競い合います。優勝者は200kgを超え、中庭にズラリと並ぶ山芋はみごとなものです。



平成21年度山芋勝負

⑤ 年明けの生年合同祝いは生まれ年（13歳61歳73歳85歳）の祝いと、新年初顔合わせの区民の1年の多幸を願う会として大切な行事です。余興は祝者の家族が出演、婦人会による「松竹梅」と保存会「馬舞」は毎年恒例です。

⑥ その他 年6回 ・初祈願・イモ主祈願・カンカー祈願・マチ祈願・水祈願・年末祈願を若保の会男性により、区内4カ所の拝所に分散し

て祈願を行う古くからの慣習があります。

(2) 行事外活動

- ① 毎月第2・4水曜日 午後2時～4時は、が
じまる会によるゆいまーる事業（ミニデイケア）
が行われ、80歳以上の高齢者とボランティア委員
50名程が会して歌や体操やゲーム、ボランティ
ア委員の手作りおやつで楽しめます。
- ② 毎週月曜日午後3時～5時まで「わんぱく広
場」と称し、小学生の子どもたちに公民館を開
放。学校帰りの子どもたちは宿題やゲーム各々
好きなことをし、見守役は交代制のお母さんや
先輩方。役場からの依頼のため行政加入者に限
らず未加入の子どもたちも利用します。

(3) 武課金

さて、これらの行事運営や職員給料を賄う資金と
して区民から頂く経常費があります。年間予算の約
50%を世帯数や人口数で算出。各世帯の家族状況で
経常費の金額は異なり、毎月20日に世帯別カード持
参で公民館に納めてもらいます。

(4) 高志保だよりと班長

毎月の村からの配布物や経常費カードと一緒に各
世帯に届ける「高志保だより」は、区の1ヵ月の行
事予定やいろんなお知らせ等を掲載し、区民に月の
情報を発信。これらを届けたり寄付金などの徴収を
するのは4つの班の若い班長たち。

1年交代の班長は欠かせない存在であり、区行政
に関わることで区を理解する機会となります。

(5) 行政加入促進

高志保の歴史は古く、新たに行政加入したくても保
証人2名などの規程があり容易ではありませんでした。
平成16年「保証人をなくし誓約書の提出と区民の承
認を得て加入することができる」と改訂後20世帯が新
加入。役場と連携しチラシなどで促進を図っています。

(6) 居場所づくり

公民館屋外ステージは午後5時～9時はストリー
トダンスの練習場。多感な10代のダンスの大好きな
子どもたちは様々ですが、ダンスに取り組む姿は一
生懸命。人の目に届かない場所よりも目の届く場所
の方が安心であり、子どもたちは生き生きしています。

(7) 字誌発刊と護永の塔再建立工事と組踊り

- ① 3年前、足かけ20年がかりの字誌「高志保」
がついに発刊。2,000ページ、上巻下巻の厚い
紙面には高志保の歴史と今に生きる人々が綴ら

れ、編集委員の苦労と熱意が表れ、子どもたち
への大きな財産になるでしょう。編集に伴い
「語やびら、明日ぬ高志保」と題してフォーラ
ムを開催。人材育成の提案を区民5人のパネラー
が語り、たくさんの区民が耳を傾け、住みよい
高志保づくりの基礎の一つとなりました。

- ② 今年6月23日慰霊の日、53年の年月で老朽化
した「護永之塔」が再建立され除幕式を挙
行。戦後65回目の慰霊祭は、追加刻銘23名の戦没者
を含めて284名の御魂に平和への祈りを捧げま
した。塔周辺の整備により新たに花園ができ、
4団体で管理。高志保まつりには花園コンク
ールなど開催予定。
- ③ 11月には10年ぶりに伝統組踊「忠臣身替り八
重瀬」を上演予定しており、役者や古典音楽芸
能のみなさんが練習に取組中。

3 活動の成果

毎年行事は同じことの繰り返しですが、団体役員
の入れ替わりで公民館へ関わる人たちは変化。いろ
んなアイデアや要望が生まれ、区民みんなが喜び
楽しめるよう工夫し、成功に繋がっています。

地域の良さは古くからの顔なじみで、屋号を名乗
ればどこの嫁、どこの子どもだとみんなが知り合
いであること。でもそれだけではなく、新しくこの高
志保に移り住む人たちにも行政加入の門を広げたこ
とで加入者が増え、活性化にも繋がる。

「地域で育ち地域に帰る」公民館を集会や憩いの
場として多くの方が利用し、地域で子どもたちを育
てる環境づくりを大切にすれば、いずれまた地域に
帰ってくる。公民館はその中心の役割を果たし続け
ているのです。

4 今後の課題

少子化、核家族の流れで若い世代の人集めは大き
な課題です。昔ながらの受け身の体制では公民館は
活用されなくなります。もっと魅力ある運営の企画
や情報の発信を続け、行政未加入の人たちを巻き込
みながら展開してゆくことが大切でしょう。

今後は法人格（地縁団体）取得をめざし、財産管
理の明確化、公民館独自で収益運営事業などの展開
ができれば、もっともっと多くの人たちが公民館に
集うことでしょう。